
新芽 1

聖子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

新芽 1

【Nコード】

N3978A

【作者名】

聖子

【あらすじ】

ある朝、俺は自分の体に見慣れないものを発見した。それは、芽だった。妻との距離、不倫、会社での立場、様々なことに悩む主人公に訪れた不幸。

1（前書き）

*植物が体から生える話に嫌悪感を持たれる方は、閲覧をお控えください。

ある朝、いつものようにシャワーを浴びようと、洗面所でパジャマを脱いだ俺は、見慣れないものを自分の体に発見した。

毛だ。白い極太の。

仰天した俺は、その毛を良く見ようと鏡に飛びついた。

じっくり見てみると、それは、毛ではなかった。

芽だった。

芽は、少々上向きに、左胸辺りから堂々と顔を出していた。

その様を目にした瞬間、背筋に走る物があり、俺はその芽を引っこ抜こうと指をかけたが、それは叶わなかった。芽はまだほんの子供で、とても華奢だったのだが……、

どくん、どくん、どくん……

脈を打っていた。

指先が脈を感じた刹那、俺の頭を嫌な考えが過ぎり、指先は芽をつまんだ形のまま動きを止めてしまった。

これは、一体どこから生えているんだ？

この根は、一体何に張り付いているんだ？

この脈は……。この位置にあるものは……。

背中を冷たい汗が流れ落ちていった。

ま、まさか……心臓に根を張ってる、なんて事ないよな？

そんな俺の疑問に返事をするように、心臓は存在を主張しだす。

と同時に、俺の頭に芽の根が心臓を包み込むように張っているイメージが、浮かぶ。

途端に、指が震え始めた。体が、動かない。呼吸が、上手くでき

ない。

「ごくり、と生唾を飲み込む音が、拡声器でも通したように頭に響く。」

コンコン

びくつと体が痙攣したように反応した。

「あなたー？ 時間大丈夫なのお？ もう7時過ぎてるわよ」

妻の舞子だ。返事をしなければ。気付けば金縛りは解けていた。

震える指を、そうつと芽から離す。唾を飲み込んで、カラカラになつていた咽を潤してから、

「おう、わかつてる。もう出るよ」

と、答えた。なんとか声が震えることはなかった。

しかしとりあえずそう答えたものの、解決方法が見つからない。

医者に行くべきだろうか。行くべきなのだろう。

だが、早急に対処しなければいけない仕事が溜まっている。部下には任せられない種類のものだ。そして、会議もある。今日は休むなんてとんでもなく、遅れるわけにもいかない。

俺は、病院へ行くという選択肢を打ち消し、またパジャマを着て脱衣所から出た。

シャワーを浴びる時間も気力も、もう無くなっていた。

「どうかしたの？」

戸の近くで待っていたのか、愛すべき妻が走り寄って来て、心配気にそう聞いた。

「どうもしないよ」

俺は、会社の取引相手に使う様な安心させる笑みを顔に浮かべ、舞子の肩に手を置き体をリビングの方へ方向転換させた。

「背広に着替えてさっさと行くから、朝食用意しといて」

そう言い残して、寝室へ入る。

パジャマを脱ぎ、ハンガーにかけられたスーツ一式に、急いで着替える。下着用の白いＴシャツを着るときに、芽が潰れやしないかと多少気にかけたものの、潰れたってかまわない、むしろ大歓迎だ、と思い直し、豪快に着た。

着替えを終えリビングに行く、舞子が朝食を用意して待っていた。今朝も完璧な純和風だった。俺は席に着き、「いただきます」と言い、目の前の食事に箸をつける。味はいつもどおり良かったが、俺はほとんど上の空で平らげ、食器を流しに持っていく。

「あなた、さつきから変よ。どうかしたの？ 会社はお休みになられたら？」

そんな俺を心配したらしく、舞子が声をかけてきた。

「いや、大丈夫だよ。ありがとう。それに、休むわけにはいかないんだ。今日は大事な会議だしね」答えながら、食器をそつと流しに置く。

「パパに私から言えば大丈夫よ」

舞子は会社での婿養子の立場ってものを知らない。

「いいよ。本当に何とも無いって。もう時間も無いし、行ってくるよ」

これ以上会話を続けると、舞子は本当に電話をしてしまいそうな気配だったので、慌てて用意しておいた鞆を持ち玄関へ向かう。

舞子が最後まで心配そうに見ていたが、俺は笑って行ってきましたと言い、玄関を出た。

エレベーターに向かう途中、俺の頭は突然生え出した芽のことで一杯だった。

何故、生えてきた？ 一体、何の植物なんだ。俺は山に行った覚えもないし、植物なんて最近は全く触れた覚えがない。

不安からか早歩きになっていた。昇降場に着き、降りるボタンを押す。

いつもの事ながら、なかなか来ない。イライラする。
だから三十階なんて嫌だったんだ。値段も高度も高いばかりで、

何もいい事なんてありやしない。

結婚祝いに養父から貰ったマンションに、心の中で悪態をつく。それもいつもの事だ。

カリカリしながら俺は、やっと着たエレベーターに乗り込んだ。引っこ抜いたら血がでるのだろうか。根はもうどこまで張っているのか。早めに病院に行き、調べてもらわなければ。

何人が相乗りした人に挨拶しながら、そんな事を考えていると、エレベーターは一階に着いた。

これから始まる一日にうんざりしながら、俺はマンションを出、会社へ向かった。

電車の暖かい空気に絆され、まだ眠いと言う体にムチ打って、俺は立ち上がった。体が重い、そう思いながら電車を降り、改札口を目指し階段をゆっくり降りる。

駅を出て慣れた道を歩いていると、今日の会社での出来事が思い出されて来る。

意見をする事が許されない、欠席する事も許されない、いるだけの会議

無能上司と決め付けている部下の舐め切った態度。

直美の今夜の誘いを断ったときの厳しい視線。

全くもって不快な事ばかりで、思い出しても余計疲れるだけだ。

しかし、嫌なことというのは不思議なことに、思い出したくなくても勝手に頭に浮かんでしまうから悩ましい。そして、最高に不快な出来事が頭に浮かんだ。

胸から生えていた芽だ。

引きちぎってやろうか。

ふと浮かんだ考えを、俺は良いアイディアだと思った。

根本的解決にはならないが、少なくとも見るときに生まれる不快感は消える。

さっそく試してみよう。

いくらか軽くなった足取りで、俺は残り僅かな家路を急いだ。

「おかえりなさい」

舞子がいつものように優しい笑みを浮かべて、玄関で迎えてくれた。

直美なんかと不倫している自分が、酷く薄汚れたものに思えて、良心が痛んだ。

舞子を、愛している。それは確かだ。

だが、育ちの良い舞子と、悲惨な暮らした俺には、どうやっても埋まらない溝があった。そしてそれは、結婚生活が長くなるにつれて、どんどん深さを増していった。

汚れを知らない様な舞子は、俺には眩し過ぎた。付き合っている時は、そこが彼女の最愛の魅力だったのだが。だから似たような境遇を過ごして来た直美を、抱いてしまったのかもしれない。彼女に幼少時代の思い出を打ち明けられた夜に。

そんな事を俺が考えてるとは、露ほども思っていないだろう笑みを浮かべて、舞子は俺の鞆を抱えながら聞いてきた。

「お風呂にする？ それとも先にお食事にする？」

「あー、先に風呂に入ってくるよ」

「わかったわ。じゃ、リビングで待つてるから。上がったら一緒にお夕飯にしましょう」

彼女はそう言い、鞆を書斎へ置きに行った。

靴を脱ぎ終えた俺は、背広を着替えようと寝室へ向かう。

寝室に入ると、いつもと変わらない光景が目に入った。

綺麗に整えられているベッド。その上にきちんと畳まれ置いてあるパジャマ。一系の乱れも無く整列している本。

部屋が散らかっている場面を、俺は一度として見たことがなかつ

た。

いつも整然とされ、床には埃一つ無い。

常に完璧で在り続ける舞子。それが俺には羨ましくもあり、妬ましくもあった。汚してみたい、傷つけてみたい、そんな欲望に気付いたのはいつの事だったろう……。

俺は一度思考を止め、背広を脱ぎ用意してあったハンガーに掛けた。そして脱いだワイシャツをクリーニング用のランドリーボックスに入れる。

その後、ベッドの上に置まれたパジャマを手に取り着始めた。

本当はそのまま下着で風呂に行く方が楽なのだが、完璧な舞子を見ると一度パジャマを着てしまうクセがついた。

パジャマを着て風呂場へ向かい、洗面所に着くとまたパジャマを脱ぐ。とても不毛な事をしているとは判っている。だが、やめる事はできなかった。

シャツを脱いで鏡に近寄り、まじまじと左胸を見てみる。

芽は、少し伸びたように見える。ちゃんと摘んでみると、やはり朝より摘みやすくなっていた。

恐ろしくなった俺は、すぐさま指を離そうとしたが、意外に引つ張ったらすばと抜けるかもしれない、という考えが頭を過ぎった。

震える指でやさしく引つ張ってみると、期待に反して芽は抜けることは無く、俺の指にしっかりとした抵抗感を与えた。

ふうー。口から盛大なため息を漏らすと共に、俺は指を芽から離した。

それからもう一度、奇妙になってしまった己の体を確かめるように見て、浴室へ入った。

その夜、俺は殆ど眠る事ができなかった。

1（後書き）

初めまして。ここまで読んで下さってありがとうございます。小説
についてのあとがきは、最終回で述べます。

鏡の中には、驚愕の顔をした男が立っていた。

伸びた。

気がする、ではなく、伸びた。確実に断言できるほど、芽は伸びていた。折り曲げられた首が胸から突き出して、首の先には大きめの顔があった。

蕾だ。

そう認識した途端、俺は洗面所の引き出しという引き出しを開けまくっていた。

どこを探してもハサミは見つからない。

どこだ。どこなんだ、早く出て来い！

と、目の端に、洗面台に置かれた舞子のかみそりが映る。俺は、すぐさまそれを拾い上げ、芽に押し当てた。

そして、指に力を込め、切断した

「ぐあぁっつ！！」

何が起きているのかわからなかった。

霞む視界には天井が映っており、俺は左胸を抑えて床をのた打ち回っていた。

呼吸ができない！！ 猛烈な息苦しさを感じて、俺は金魚の様に口をぱくぱくさせる。

ドン、ドンドン！！ ドンドン……

ドクン、ドクンとまるで脈がそこにあるかのように響く頭に、微かに舞子の声が届く。

「あなた？ 大丈夫？ 何があつたの、ここを開けて頂戴！」

返事をしようとするが、声がでてこない。不気味な音が聞こえる、
と思つたのは自分の呻き声だった。

「苦しいのね？ 待つて、今救急車を呼ぶわ！！」

だめだ、救急車は、だめだ……、待つてくれ、舞子。

何がどう駄目なのか判らないが、俺は救急車を呼ばれる事を拒否
していた。

遠のいていく足音を引き止めたくて、声を絞り出す。

「う……つま、まいこ……、俺は、大丈夫だ、……救急車は、呼ば
なくて、いい」

俺の精一杯の努力は、口から出る度、浮いては消えてった。

しかし、足音はすぐに戻つて来た。奇跡の存在を信じようかと思
つた。

「あなた？ 何か言つた？ どうしたの、無事なら返事をして！」

舞子の錯乱する涙交じりの声が聞こえる。

気が付くと、鍋を頭から被つて始終敲かれている様な騒音は薄く
なつていた。呼吸もできる。俺は、まだ鈍く痛む左胸を抑えて立ち
上がった。

目の前にあつた鏡を見て、愕然とする。

切つたつもりの植物は、まだそこに居た。薄皮一枚切れて汁を出
しているだけだった。

俺が先程の痛みの原因を理解するのに、そう時間はかからなかつ
た。

……心臓とこの植物が、繋がっている？

さっきの痛みは、この植物の防衛本能からなのか？

俺が傷つけようとしたから？

ぐるぐると回る頭に、舞子の声がなおも聞こえていた。

「あなたっ、返事をしてえ！」

悲鳴のようなそれを聞いて、俺はようやく声を出した。

「ああ、無事だ、なんともない」

他人の声を聞いてるようだった。

独特の臭いに鼻をつまみそうにながら、俺は長椅子に座っていた。随分年季の入ってそうな椅子で、ところどころシートが破けて中の綿が飛び出ていた。その上から留めてあるガムテープが、また貧乏臭さを漂わせる。

儲かってないのだろうか、まあ、国立だからな。

そんなことを思いながら俺は、一向に自分の名前を呼びそうになり看護婦を眺めてから、トイレへ行こうと立ち上がった。トイレへ一步を踏み出した途端、どすん、と座る音が背後から聞こえた。今まで俺が座っていた場所に、誰かが座ったようだった。

午前中の受付時間の終了間近に来たせいか、病院は、すごい混み様だ。この数を、たった数人の医者が相手をしているのだと考えると、医者がどんなスポーツ選手よりもタフに思えてくる。

トイレに入った俺は、洗面台の淵に手を置いて、息を付いた。顔を上げると、そこには血走った目をして、頬が幾分かけた男が居た。たった一日でこうも変わるものなのかと、自分の顔をしげしげと眺めた。こりゃ、俺が舞子でも心配するなあ。

俺が洗面所で倒れた後、舞子の取り乱し様は今まで見たことがない程だった。

必死に何でも無い、と言い張ったのだが、こうして会社を休まされ、病院に送り出されてしまった。会社を休むことだけは、避けたかったのだが、彼女は頑として聞かなかった。

舞子は、俺の診察にも付き添いたそうにしていたのだが、今日は彼女自身が定期健診のため、不可能だった。俺としてはおかげで助かったが。舞子は、生まれつき体が弱かった。大人になった今でも、こうして定期的に医師の診断を受けていた。舞子の実家、武藤家専門の医師に、だ。そのため、彼女は月一は自分の実家を訪ねている。俺としては……、いや、どうでもいいことだ。

俺は、トイレの個室に入って、ジャケットを脱ぎ、下に着ていたシャツのボタンを数個外した。

左胸に目を向けると、依然として真っ白な植物が蕾を携えて生えていた。背丈は殆どなく、節目も一つだけだ。

節目を目にした瞬間、何か背筋を上ってくるものがあり、胸を掻き毟りたくなる衝動に思わず目を瞑った。

これを、他人に見せるのか。

舞子にすら見せられない、これを。

相手は医者だ、怯えることは無い。他人だからこそ見せられる。そう自分に言い聞かせるが、躊躇する気持ちが消えることは無かった。

元の様に服を着て、トイレから出ようと戸を開けたところで、自分の名前が聞こえてきた。

「ムトウさ〜ん、ムトウ勝彦さ〜ん」

足が止まる。ムトウと言われる度に覚える違和感、嫌悪感からではない。

胸から湧き上がってくる、言いようの無い黒いもやが、俺の足を地面に縫い付ける。

何をそんなに恐れているのか、何故こんなにも怖がっているのか。

自分にも判らない。

「ムトウさ〜ん」

慣れることのない、新しい苗字を呼び続ける看護婦の声を背に、

俺は歩き出した。

俺は、とんだチキン野郎だ。

自分がこんなに情けないやつだったとは、新しい発見だ。できれば自覚したくはなかったが。

俺は病院から逃げた後、図書館に来た。胸に生えた植物について調べようと思ったからだ。

人の体を苗床にする植物。それも、まだ生きている人間を。聞いたことがない。

だが、確か動物の死骸などから生える植物はあった筈だ。それをベースに調べてみようと思う。

俺はとりあえず、植物の基本が載ってそうな本を手についた。パラパラと捲って見ると、目的の項目はすぐ見つかった。

>>腐生植物<<

腐生植物とは、種子植物の中で、植物体に光合成で自活する能力がなく、根などの地下部に菌類の菌糸を呼び込んで、そこから栄養を得て生活するものを指して呼ぶ言葉である。

これらの植物では、地上部はほとんど葉緑体を持たない。全株が真っ白であるものや、逆にほとんど真っ黒のものもある。葉は鱗片状に退化し、茎にまとわりつく。したがって、地上から伸びた茎の先に花だけが並んでいる、といった状態になる。平行植物を思わせる姿のものもある。ごく小型の植物が多いが、ラン科のツチアケビは高さが1m近くなり、全株が橙色で非常に目立つ。同属のタカツランは、さらに背が高く、つる植物になって樹木に登る……………

確かに俺に生えた植物も、真っ白だった。葉があつたかどうかはよく見てないのでわからないが、茎の先に花だけあるような状態といった事も、合致している。

胸に生えた植物は、腐生植物の特徴と酷似していた。しかし、俺は生きている。まだ腐っちゃいない。という事は、生きてる植物に寄生して養分を得るといふ寄生植物の一種なのだろうか。だが特徴から見ると、胸の植物は腐生植物寄りだ。植物のスペシャリストでも何でもない俺には、判断しかねた。

本の巻末には、様々な種類の腐生植物の写真が載っていた。それらは、どれも奇妙な容姿をしていた。しかし、美しい花もあった。

特別に綺麗だと感じたのは、ギンリョウソウ<銀竜草>という花だった。汚れる事はないだろうと思わせる程の、白い肌。葉は鱗の様に透けている。見たこともないが、竜の鱗の様だ、と思った。あまりの神秘さに、俺はしばらく見惚れていた。

どんな花が咲くのだろうか。

ふとそう思った自分に驚く。邪魔でしかない、不快でしかない、この植物の花に興味を覚えるなんて。

ギンリョウソウは、生理的嫌悪感を覆すほどの美しさだった。

2 (後書き)

あと、1、2話で終了予定です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3978a/>

新芽 1

2010年10月9日06時41分発行